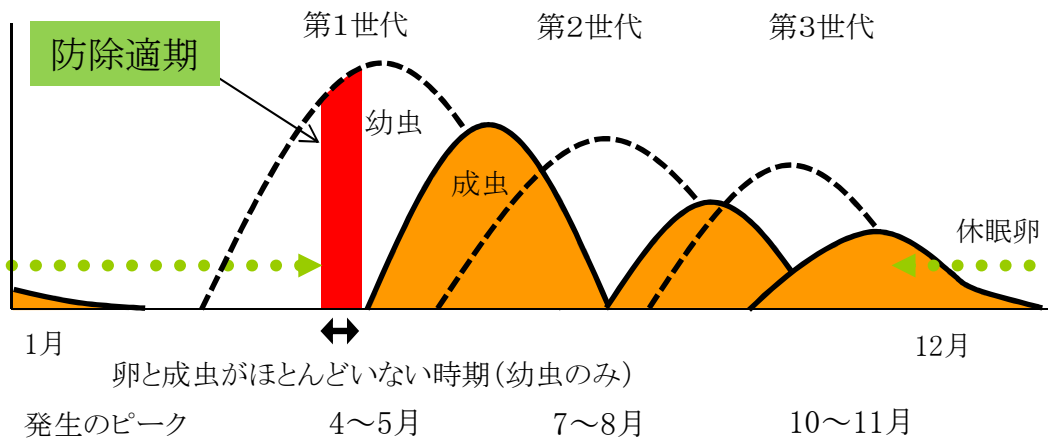


コラム①：カンシャコバナネナガカメムシの防除適期と要防除水準

1 予報に載っている防除適期とは

カンシャコバナネナガカメムシ(ガイダー、チンチバック)は長年にわたり一斉防除が行われてきています。本種の防除は、農薬の効きにくい卵や成虫がいない時期が最適です。卵は2月下旬頃からふ化し始め、4月中旬から下旬にほとんどふ化し終わり、その数週間は成虫もほとんどおらず、この時期はさとうきびの草丈も低いので農薬散布するのに適しています。

下の図の赤い部分が最も薬剤散布に適した時期です。この時期は卵がすべてふ化するであろう時期を予測することにより算出することができます。2月1日を起点として、日平均気温が13℃を上回った温度(たとえば2月1日が16.4℃だった場合3.4℃)を累積し、280℃を超えた日が防除に最適の日となります。その前後1週間を防除適期として示しています。また、この予想日はほ場に発生している幼虫の平均齢期が2.5齢にあたるため予報資料では「2.5齢期予想日」という表現になっています。



2 防除が必要なのは一茎当たり何頭？

農作物に害虫が発生したとき、その発生量を確認しないまま農薬散布を行うと、防除効果による増収分では農薬購入及び散布にかかる経費を補えない場合があります。

カンシャコバナネナガカメムシでは、発生量が一茎当たり9頭以下ではさとうきびに減収は見られず、防除を必要としないことが知られています。つまり、この状態で防除を行えば、農薬購入及び散布にかかる経費が無駄になります。それではいったい一茎当たり何頭のときに防除効果と経費のバランスがとれるのでしょうか(これを要防除水準といいます)。調査研究の結果、一茎当たり20頭以上のときに防除効果が経費を上回ることが分かっていますので、防除適期に発生量を確認の上、防除の可否の判断を行ってください。

